

日本マイクロサージャリー学会 — 40周年を迎えて—



理事長 矢島弘嗣

このたび日本マイクロサージャリー学会が「40周年」を迎えられましたことは、名誉会員をはじめとする全ての会員の方々が日頃の努力を積み重ねて、本学会を発展させていただいたことにはほかならないと考えております。学会役員を代表して皆様に深くお礼申し上げます。

さて本学会は1974年に奈良県立医科大学の講堂で第1回研究会（玉井進会長）として開催されて以来、40年間に亘り学会活動を続けて参りました。そして1987年の第14回学術集会から「学会」に改名されて現在に至っております。マイクロサージャリーは手術用顕微鏡を用いて微細な手術を行う技術であり、脳神経外科や眼科領域などでも以前から行われておりました。本学会では微細な血管の吻合や神経の縫合を基本手技として、おもに整形外科と形成外科の医師達が情報交換や技術の向上を目的として設立されたものであります。当初は切断肢・指再接着術と遊離複合組織移植術がメインテーマとなっておりますが、近年では四肢同種移植、人工神経、穿通枝皮弁やリンパ浮腫の治療などがトピックスとして報告されております。

人でいえば40歳とは最も精力的に仕事ができる年齢と思われれます。私自身も40歳くらいの時が、最も有意義な研究を行い、かつ最も多くの論文を書いた年でもありました。すなわち一番脂がのりきった年齢といえるでしょう。再建マイクロサージャリーは医学界においては数少ない日本発祥の技術として認められており、今後も世界をリードしていかなければなりません。その様な意味においても、今回ひとつの節目として40周年の記念行事を行うことは非常に有意義なことであると確信しております。そして10年先の「50周年」を目指して、マイクロサージャリー学会をより一層発展させるべく、若い先生方にはいろいろと新しい研究を行ってもらい、そして新しい手術方法を開発してもらわなければなりません。また評議員の先生方にはしっかりと若い先生達を教育してもらわなければなりません。これからも形成外科医と整形外科医がしっかりと腕を組んで、また互いに競争して、10年後も世界をリードしていく「日本マイクロサージャリー学会」であるように、全会員に一層の努力を続けて頂きたいと願っております。

今までの業績を礎として、今後の発展を期し、10年後に再びこのような喜びを多くの会員の皆様と分かち合いたいものです。どうかこれからも学会の運営に協力していただきますようお願い申し上げます。

40周年記念学術集会を開催するにあたって

日本マイクロサージャリー学会
40周年記念学術集会
会長 小林 誠一郎



本学会は1974年に研究会として発足以来、早や40年を数えるに至りました。今回は節目の年に当たることから、学術集会一日目に40周年記念式典・祝賀会が執り行われます。この記念すべき学術集会を岩手医科大学で主催させていただくことになりました経緯は、現理事長と副理事長である小生が同級であり、心を一つにして記念式典・祝賀会ならびに学会をつつがなく開催できるであろうとの理事の皆様の御意向からではなからうかと思っております。何はともあれ、学会を主催できますことは誠に名誉なことであり、岩手医科大学形成外科学講座を代表して、理事会の皆様ならびに会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

日本が世界に先駆け主導してきた再建外科等におけるマイクロサージャリーの発展は目覚ましいものがあり、現在では必須の手術手技として確立されたものとなっています。今回は、40周年を記念する学術集会であることから、そのテーマを「原点から未来へ」と題して企画しました。研究会発足以来、本学会を主導されたパイオニアの先生方に貴重なご講演をいただくことで原点を再確認し、切磋琢磨されている若手マイクロサージャンにアイデア・イノベーションなどを含む新規性を発表していただき、新旧の交流を介して、今後の一歩につなげることを目指したいと思えます。

記念式典では、現在まで本学会を主導されてきた波利井清紀先生と玉井進先生に記念講演をお願いしました。研究会発足前後からの世界との交流や日本の成果を踏まえたお話の中に、今後が見えてくるのではなからうかと思っております。

学術集会の方は、特別講演には世界の現状を俯瞰すべく、WSRMの会長であるLawrence Scott Levin先生をお迎えし、40周年記念特別講演には生田義和先生、野崎幹弘先生にお引き受けいただきました。また、パイオニアの先生方の教育講演と若手の先生方等によるシンポジウムとパネルディスカッションでは様々なテーマを取り上げさせていただきました。盛りだくさんでまとまりに欠けるとも思われますが、若手への教育的配慮を含めてということでご容赦いただければと存じます。

幸いにも、若手の研究発表の場として企画しました「U40 エデュケーショナルコンペティション；次世代からのIdea & Innovation」を含めた一般演題は186題と予想を超えた数のご応募をいただき、特別講演等を含めると計317名の先生方に演壇にお立ちいただくことになりました。ご講演ならびにご発表いただきます先生方には厚くお礼申し上げます。

形成外科・整形外科領域のマイクロサージャリーに関する診断・治療の研究・開発とともに、本学会で得られた情報を患者の皆様や医療者に発信することが本学会の大きな使命であり、本学会の成果は明日の医療の進歩につながるものであります。発展的な議論のもと実りある学会となりますよう、ご参加いただく皆様のご協力をお願いし、初秋の盛岡をお楽しみいただければと存じます。

また、ご共催ならびにご協賛いただきました団体・企業の皆様には厚く御礼申し上げます。

40周年記念誌発行にあたって



第11代理事長 中 塚 貴 志

日本マイクロサージャリー学会が、1974年の研究会として発足して以来、昨年で40周年を迎え、ここに40周年記念誌を発行するに至ったことは、偉大な諸先輩ならびに本学会を支えて下さってきた会員諸兄のお力によるところが大であり、学会を代表して深甚な感謝の意を表したいと思います。

振り返ってみますと、本学会は整形外科と形成外科のマイクロサージャリーを専門とする医師が集い、その技術・知識を競いながらかつお互いに強調しつつ、心を一つにして、その学問および医療としての発展を追求してきた学会です。そして学会創生期においては、切断指再接着や遊離皮弁移植などマイクロサージャリーの基礎を築き上げる基となった多くの世界的業績は日本から世界に発信されており、その後の発展期においても、筋肉移植、骨皮弁移植、生体肝移植、静脈皮弁や穿通枝皮弁の開発など、常にわが国が世界をリードしてきたと言っても過言ではありません。

マイクロサージャリーの技術も、これら偉大な先人の努力のもと、すでに成熟期に入った感もありますが、近年はリンパ管や穿通枝のような超小口径脈管の吻合も実施されており、さらなる経験の蓄積による発展の余地があります。さらに、20年以上前には考えられなかった手・腕や顔面などの同種移植の臨床例の報告が世界的に徐々に増加しており、またこれからは再生医療を用いた組織移植も現実味を帯びてきていますが、これらの最先端医療においても血流付加といった面からマイクロサージャリーの技術は欠かすことのできないものです。

さて、卑近な例かもしれませんが、日本のスポーツ界に比べ、アメリカの主要スポーツ界—MLB, NBA, NFL など—では、偉大な業績を挙げた先人をいつまでも忘れずに讃える傾向が協会にもファンにも強く根付いており、それが結果的にスポーツそのものの普及・興隆・永続性につながっているとされています。そのような観点からすると、今回の記念誌は、これまで学会が歩んできた軌跡を現会員に示し、かつその記憶に長く留めるとともに、これからマイクロサージャリーを志す若い世代には、過去の歩みを嘯みしめてもらうとともに将来への確実な夢と希望を与えるものになると確信しています。

わが国にも複数の診療科から構成される学会は数多ありますが、本学会ほど、2つの主要診療科が長年対等に手を携えて歩んできた学会はまれではないかと思われまふ。これまで整形外科・形成外科の諸先輩が築き上げてこられた2科の学際的相互協力という素晴らしい伝統を大事に継承しながら、これからの10年—つまり50周年—を見据えて、学会がますます発展することを期待しておりますし、現役員としてそのような学会の発展のために精一杯尽力する所存です。

どうぞ会員の皆様におかれましては、ご協力・ご援助のほどよろしくお願い申し上げます。